

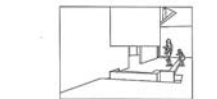
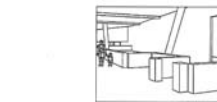
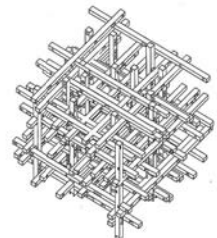
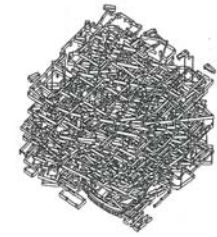
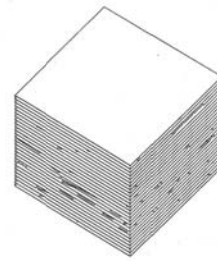
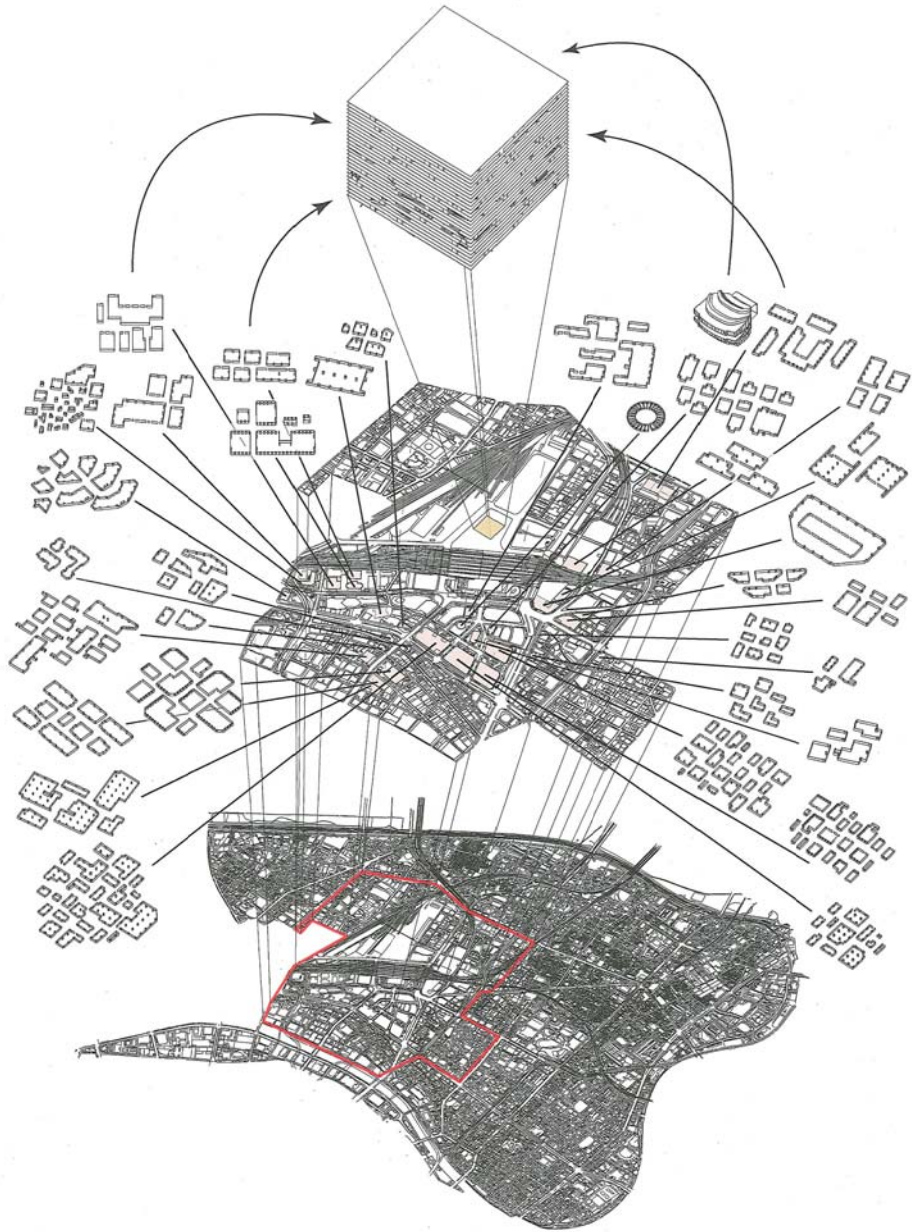
生ける都市

大阪市北区梅田、低湿地帯であった場所を泥土で埋立てて田畑を拓いたことからはじまり、その後それらを破壊し、鉄道の発展さらには地下街の発展と共にその成長の過程を歩んできた。

この過程の様々な面でこの地に根付いた人の記憶はそのほとんどが何もなかったかのように更新され続けている。

建築もその一つである。一本の柱に身長を刻んだりし、なくなるときには悲しい思いをするような住宅つくりは人と建築が日々呼吸し続ける建築とは違い都市には人との呼吸のうちにその記憶だけを押し付けられ、それを自分の中で蓄えてそのまま消えてなくなるような建築があふれている。そんな悲しい建築はもう生まれて欲しくない。もう生まれてしまったそんな建築にもそんな悲しい思いをしてほしくない。

2010年現在、梅田では翌年に新しい百貨店の開業や再開発地区の完成、既存のビルの建て替えなどによりいたるところで建設工事が行われている。今なくなろうとしている建築、さらには今そんな悲しい状況にさらされている建築、何も語らない建築に、都市に耳を傾ける。



Skin

建築を覆い、建築全体としてのスケールを決定する。ある意味、梅田という都市ともとれるこの建築の全体としてのスケールを決定するのは梅田の都市スケールである地下街の容積である。

Floor slab

記憶の器と呼び合いその形を変える。外の記憶と呼応し、スラブに穴をあけるといったように。記憶の器と直接触れ合うが、それ自体は構造さらには設備の役割を完全に果たさない厚さ 200mm のスラブである。

また各階には大阪市北区のインフラのマッピングが刻まれており、Tubeと呼ぶ。

記憶の器

地下街を通して直接梅田という都市とつながる建物の部屋、特に現在空室となり記憶だけが静かに佇む部屋から以下の情報を保存し、この地に集積する。

- ・ plan の記憶 → 柱の大きさ、間隔はその建物の竣工時期およびその部屋の地上高さ（低いほど柱間隔が狭いなど）と関連している。
- ・ 天井高の記憶 → 建物の竣工時期や経済性、用途などの理由から 2100 ~ 3000mm までである。
- ・ 外の記憶 → ある壁の向こうが外部空間の場合、その壁のすぐ裏側には人の気配を感じない。（Floor slab との呼吸）
- ・ 高さの記憶 → 部屋の地上高さは建物の床下構造や設備により様々である。
- ・ 東西南北の記憶 → 梅田という都市は道路がグリッド状ではなく、元々川であった場所を埋め立て、その上を道路としている場所もあり、敷地および建物は角度が様々である。
- ・ 人の記憶 → 人との呼吸のうちに刻まれた記憶。すなわち過去の知的生産における営みの蓄積である。

Tube

都市を支えるのはその周りのインフラであり、またそのつながりである。

この建築が梅田という都市であるならアナロジーとしてこの建築を支える構造、設備はそれらをたよりに考えられる。

Floor slab に刻まれた大阪市北区のインフラのマッピングをつなぐことにより、そのつながりを構造および設備、また階段による動線として用いる。この構造、設備は本来、床スラブに入っているものであるり、これらのうち Core と触れ合うものは設備として機能し、Core の設備機能をフロア中に上げ、それ以外は構造である。

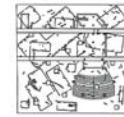
— : 構造 — : 設備

Core

構造および設備的に自立している。横の Core にはプログラムが入っており、縦の Core にはエレベーター、トイレおよびプログラムが入っている。細長いプログラムの Core は Core 以外によって成り立つ記憶の場を貫き、Core の開口からプログラムがあふれ出す。

そこで記憶としての過去の知的な営みと出会うことで、今をそして未来を切り開いていく。

2F イベントスペース、ショールーム



イベントホール

7F ワークスペース



幼稚園

8F 子供スペース



百貨店

11F 美術館



神社仏閣、教会

20F 研究施設



スーパーマーケット

24F オフィス



公園

<plan 1/3000> †

<都市のインフラ>

